

〈ウェーブレンクス(波長)〉 初演データ

打楽器：山口恭範・吉原すみれ

ダンス：武元加寿子・神 雄二

振付：石井かほる

美術協力：前田哲彦

映像：山口勝弘

“MUSIC TODAY 今日の音楽12” (企画・構成：武満 徹)

西武劇場 (渋谷)

「武満 徹・6つのデュエット (デュオ・マルチプル)」

1984年6月3日 (日) 午後4時

《曲 目》

ヒカ (悲歌) 1966 / 十一月の霧と菊の彼方から 1983

揺れる鏡の夜明け 1983 / ディスタンス 1972 / オリオン 1984

ウェーブレンクス (波長) — デュオ・マルチプル 1984

武満徹・秋山邦晴両氏のご生前より、実験工房から草月アートセンターにいたるなかで、重要なアーティストとしての武満氏に本展覧会「草月とその時代 1945-1970」に際して何らかのお願いをすることを秋山氏とともに検討しておりました。

1996年、おふたりが相次いでお亡くなりになり、その企画は中断してしまいました。そのため、草月アートセンターの活動を引き継いだとも言える「今日の音楽 Music Today」で武満氏が実験工房いらいの同志である山口勝弘氏と共同制作し、1984年に初演された〈ウェーブレンクス (波長)〉を山口氏のご協力により美術館のためのビデオ・インスタレーションとして再構成しました。

本作品の展示にあたり全体のプランを構成された山口勝弘氏、再演のご許可を賜った武満浅香様、音源のご提供をいただいた日本ショット株式会社と本パンフレットに文章の再録をご許可賜った清水徹様、そして作品再現の技術面で全面的なご協力を賜った日本ビクター株式会社の皆様方に末尾ながら御礼申し上げます。

(千葉市美術館学芸員 薬科英也)

六つのデュオ、または Duo Multiple

ウェーブレンクス(波長)

武満徹の「今日の音楽12」の企画・構成に、山口勝弘の映像制作が加わった。この作品は、武満徹の作曲による、山口勝弘の映像制作による、二人のデュオ・マルチプルによる。1984年6月3日(日)午後4時、西武劇場(渋谷)で初演された。この作品は、武満徹の作曲による、山口勝弘の映像制作による、二人のデュオ・マルチプルによる。

武満 徹・山口勝弘による

1984/1998

「WAVE LENGTH」

武満徹の作曲による、山口勝弘の映像制作による、二人のデュオ・マルチプルによる。1984年6月3日(日)午後4時、西武劇場(渋谷)で初演された。この作品は、武満徹の作曲による、山口勝弘の映像制作による、二人のデュオ・マルチプルによる。

1984年11月15日

山口勝弘

六つのデュエット、または Duo Multiple

世界が天と地に分けられ、男と女が創られて空気が流れ、音楽が生まれた。「零」と「一」という思弁的な数と較べて、「二」は実践的な数の基礎だといえよう。演奏される六つのデュオは、各々に作曲された時期も異り、関連をもたないが、このコンサートは前半と後半の二部分のデュエットのように構成されている。休憩後の Wavelength (波長) は未だ進行中の作品だが一幾組かのデュオによって演奏される多様な二重奏という形をとっている。

ウェーヴレンクス (波長) - デュオ・マルティプル

進行中の作品であり、今回演奏されるのは、2人の打楽器奏者(山口恭範、吉原すみれ)と2人のパフォーマー(男と女)、それに山口勝弘氏によって操作されるビデオと照明である。この部分と、前半演奏された5曲のデュオは、デュエットとして照応し、ウェーヴレンクス(この題名は、会場に流されるテープ音楽に付けられたもの)は、また幾組かのデュオによって構成されている。

武満 徹

“MUSIC TODAY 今日の音楽12” (1984)

公演パンフレットより転載

「WAVE LENGTH」メモ

白いベンチを置いて下さい

白い薄明の空間がある

ビデオの白い映像が少し光って

横に連らなっている ここにはそれしかない

1984年の舞台にあったパーカッションの音も

踊り手の動きも見ている人の想像にまかせる

そして武満徹の音の流れをじっと聴く

1998年11月15日

山口勝弘

さりりとした世界征服

このあいだの《今日の音楽・12》における武満徹の『ウェーヴレンクス』の世界初演は、こんちの芸術におけるビデオの可能性という点から言っても、じつに刺激的だった。会場内にテープ音楽が流され、舞台上では2人の打楽器奏者が演奏し、男女2人が踊り、さらにビデオ・スクリーンが山口勝弘の操作するカメラによるこの4人のパフォーマーの映像を示すという作品である。

たとえばふつうのバレエやオペラでは、席が遠いと小さな舞台全景しか得られないし、オペラグラスの視野からは全景は押しつけられてしまう。(だから席によって料金がちがう)ところがこの作品では、聴衆ひとりひとりの席からの自然的視像=舞台全景と同時に、舞台上のパフォーマーたちの、ときにさまざまな映像処理を加えられた全身像や部分像が拡大されたかたちで提示される。客席の位置によって運命的に定められた距離の許す視像と、その距離によって排除された視像のふたつが同時に並置されるわけである。こうしてビデオは、距離の運命的な力を廃絶して、いわば複合トポロジックな芸術空間を出現させる。

いや、距離=空間だけではない。ビデオは時間もまた征服し、変容させる。山口勝弘のビデオ・スペクタクル『未来庭園』はこれを明示した。

会場の空間に、ビデオモニターを数台ずつまとめた7つのオブジェが、いわば伝統的な日本庭園の抽象化のように配置される。池、せせらぎ、木立……。8台のモニターを上に向けてセットした池は鯉の泳ぐ姿を映しだし、のぞきこむこちらの顔も水面上に映る。モニター4台を積みあげた上に鏡を組合せた梯模型をのせ、抽象的な樹のかたちにした『レーザー樹』では、逆梯形部分のなかに赤や青のレーザー光がとびかい、そのまんなかに浮かぶ球体は木の間ごしに見る満月のようでもある。あるいは宇宙に浮かぶ地球か。とすれば、それを見る私はいまどこにいるのか?

ビデオ・オブジェによる池や木立の模像はあまり問題ではない。むしろこの疑問からビデオ的な次元が始まる。そして、その次元をもっとも明瞭に示しているのが、壁面に14台のモニターを横一列に並べた『応答する窓』である。

14台のモニターのうち、1台おきの7台はあらかじめセットされたソフトの映像をうつしだす。海、打ち寄せる波、蔦のからまった煉瓦の壁面、高層ビル。画面の切り換えのひとつの方法として、たとえば打ち寄せる波の映像のまんなかに小さな四角形が出現し、その四角形がすこしずつ大きくなるとそこに高層ビルの風景が映っていて、やがて海の映像にとってかわる。海の風景のなかに四角くくりぬかれた高層ビルの風景、——この映像

は構図によってマグリットのいくつかの作品、たとえば『囚われの美女』を思い起こさせて、じつに美しい。

残る7台のモニターは、会場=庭の中央に立つゆっくりと回転する柱の内蔵するカメラが捉えた会場=庭の風景、レーザー樹や池にのぞきこむ観客や、この壁面を見る私自身の横顔や背中を映しだす。見ている私が見られる私へと逆転する。その隣りの画面には海、煉瓦の壁面、高層ビルといった《外》が映しだされている。モニター画面といういわばこの庭にしつらえられた《窓》から見られた《外》、あるいは庭のなかに取りこまれた《外》の横に、私とそのなかにいるこの庭の《内》が、《窓》からのぞける《外》へと切り替えられて映しだされ、その変容された《外》が、ときに、《窓》からのぞく私の背中姿となる。——そのとき私は《内》にいるのか《外》にいるのか、しかもときどき、そういう鏡像的眩暈をさらにつよめるかのように、隣りの画面には高層ビルの窓ガラスに映った隣りのビルの姿が映る……。

《窓》とは本来、《内》から《外》をのぞくための、あるいは《外》を《内》に取りこむための装置だが、この『未来庭園』におけるビデオというこの『窓』は一種のふしぎな鏡装置として機能して、この空間をいわば非ユークリッド的空間へと変容させてしまうのだ。

そうやってこれらの《窓》はこの庭の空間を変容させるのだが、時間もまた変容させられる。海一蔦と煉瓦の壁面—高層ビルの系列の《窓》には、ある切り取られた時間、いわば永遠の現在時が静かに流れ、その隣りの《窓》には、いまこの庭に流れるライヴの現在時が流れ、そのふたつの時間の交錯が、空間の鏡像的眩暈と静かに応答しあうのである。

思えば《窓》は、『ヴィクトリーヌ』で出発した山口勝弘にとって持続的な主題だった。《内》と《外》、見るものと見られるものという二分法とそれを支配する自同律を、《窓》の主題の追究と深化をとおしてさりりと宙づりにすること。空間と時間のさりりとした変容=征服。山口勝弘はビデオ・スペクタクル『未来庭園』でそれをなした。別にそこまで考えずにこれらのビデオ映像をたのしみながら、そして流れるところよい音楽を耳にしながらこの庭を散策するだけでも充分なのだが、映像の誘うさきにひろがる芸術的時空はじつに刺激的なのである。

清水 徹

“JAPAN INTERIOR DESIGN” No.306

(1984年9月号)より転載



FUJI RDPII

RDPII 146



RDPII 11

RDPII 12

RDPI 145

FUJI RDPI

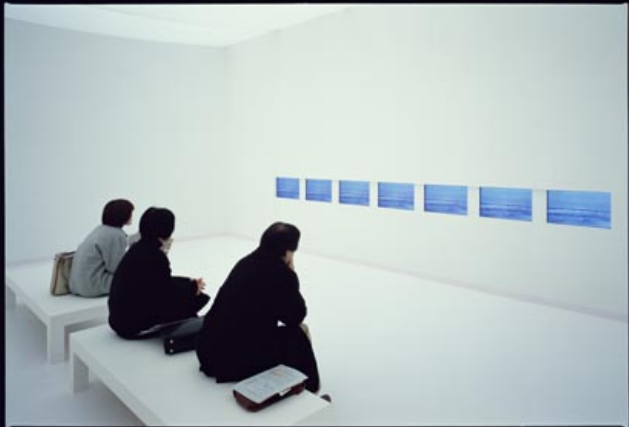


RDPI 15

RDPI 16







FUJI RDPI

FUJI RDPI



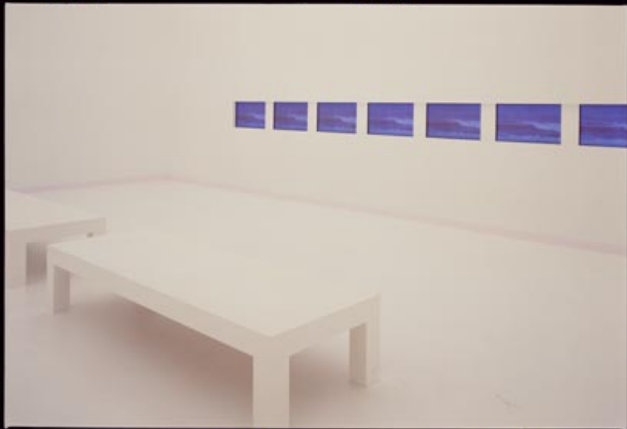
RDPI 17

RDPI 18

RDPI

FUJI RDPII

FUJI RDPII



7

RDPII 18

RDPII 19

RDPI 146

FUJI RDPI



RDPI 12

RDPI 11

10



FUJI RDP

FUJI RDP



8

RDP 9

RDP 10

RDP 146

FUJI RDP



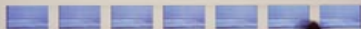
RDP 15

RDP 16



FUJI RDPI

FUJI RDPI



RDPI 17

RDPI 18

RDPI